



●● 第63回全国俳句大会 大会賞 ●●

家中の鏡に見せる花ごろも

東京都

高原 たかはら

桐 とう

罇を離れて高く罇れり

埼玉県

根岸 ねぎし

善行 ぜんこう

新しき楽譜の届く四日かな

富山県

あらたまちこ
荒田眞智子

海市より真白き鳥の飛びたてり

東京都

つじまえふみえ
辻前富美枝

●● 第63回 全国俳句大会 秀逸賞 ●●

太卷をはみ出す玉子村祭

東京都

かなたに
金谷 洋次

また何かしでかしさうな子猫の眼

愛媛県

そがべたかお
曾我部 剛生

日焼して足速くなる子供かな

神奈川県

かどわき
門脇 明子

男等を引き摺り回す十畳凧

静岡県

すずき
鈴木 順子

はひふへほ「は行」は春の笑ひごゑ

福岡県

くま
隈 可須奈

しばらくは声で闘ふ寒稽古

愛媛県

宍野ししの

宏治こうじ

子の返信早し短しあたたかし

宮崎県

日高ひだかまりも

人の世につながるやうに雪を搔く

山形県

小島こじま

緑泉りよくせん

黙に来て黙に加はる終戦日

東京都

前田まえだ

拓たく

慟哭のかくも静けき涅槃絵図

三重県

松村まつむら

正之まさゆき

次頁以降、各選者の特選三句及び入選二十句。空欄は類句や既発表句のため削除したもの。

石井 いさお 選

伊藤 伊那男 選

引鴨や雲の領巾振る鳥海山
 黙に来て黙に加はる終戦日
 雪搔の屋根から屋根へ声かけぬ
 涯までも空のととのひ鶴帰る
 花冷えや本退けて置く血圧計
 若狭晴れ風に身の透く干鰯
 静寂もまた音であり夜の秋
 叩きつけ晒す楮に水硬し
 甲斐駒の風を抱へて雁帰る
 晴天や塩で蓋する味噌づくり
 農小屋の霜夜に傾ぐ竹箒
 降る雨を皆ほめてゐる田植かな
 風にさへつまづいてをり花疲れ
 探梅行探鳥会とすれ違ひ
 青空の小さき虚より落雲雀
 樹木医の木槌の打診木守柿
 天空の風はでこぼこ揚雲雀
 漕ぐ度に身の軽くなる半仙戯
 腹筋の割るる青年夏来る
 お遍路に手渡す米の白さかな

秋田 岩谷 塵外
 東京 前田 拓
 神奈川 塚本 治彦
 愛知 尾崎恵美子
 栃木 小林 申忠
 愛知 尾崎恵美子
 愛知 館野 茂子
 兵庫 衣笠 修爾
 埼玉 佐藤 弘
 千葉 立石 肇子
 岡山 山本麻沙子
 広島 坂本たか子
 富山 脇坂琉美子
 神奈川 渡辺 健
 東京 高山 檀
 広島 小倉 伸也
 三重 谷口 ちほ
 静岡 関口喜代子
 東京 野村 親信
 沖縄 筒井 慶夏

家中の鏡に見せる花ごろも
 人の世につながるやうに雪を搔く
 白湯吹いて山を見てゐる蛇笏の忌
 慟哭のかくも静けき涅槃絵図
 負けて聞く勝者の校歌夏逝けり
 太巻をはみ出す玉子村祭
 昼寝覚雲踏むやうに畳踏む
 西行忌家の中とて杖を突き
 改札を横向きに出る浮輪の子
 石はみな流転の形ケルン積む
 三つ買ひ一つ供へる桜餅
 老書家の書の大あばれして涼し
 百歳は無理と言ひつつ蝮酒
 灌がるる度のかがやき甘茶仏
 この浦に父の生涯箱眼鏡
 杼のやうに出入りせはしき菓箱かな
 箱はまた柩に似たり雛納
 しばらくは声で闘ふ寒稽古
 軍艦島冬夕焼に燠となる
 春愁の息吹きかけて鏡ふく
 パレットに小窓のありて百千鳥

東京 高原 桐
 山形 小島 緑泉
 東京 越前 春生
 三重 松村 正之
 茨城 坪 文雄
 東京 金谷 洋次
 埼玉 梅田ひろし
 岡山 大塚 功子
 富山 杉本 恵子
 栃木 たなかまこと
 千葉 塩野谷慎吾
 和歌山 倉田 信司
 東京 谷川 治
 神奈川 高杉 桂子
 島根 吉浦 増
 愛知 古賀勇理央
 神奈川 団藤みよ子
 愛媛 穴野 宏治
 長崎 小林美智子
 福岡 大堀すが女
 富山 新村美那子

井上弘美選

今井聖選

秋まつり笛を吹くべく帰りけり
人の世につながるやうに雪を掻く
その奥に一湖ゆらかぬ花の雨
大杉に雲流れをり弓始

埼玉 佐藤 弘
山形 小島 緑泉
東京 市村 和湖
広島 坂本たか子

ウエスタン流れ花見の屋台かな
鶏小屋に鍵落ちてゐる遅日かな
長き夜や書肆の主の二十選

福岡 伊藤 照枝
兵庫 千鳥 由貴
埼玉 田部 恭子

石はみな流転の形ケレン積む

栃木 たなかまさこ

紙雛男ひとりに夜が来ぬ

千葉 平野 鏡哉

梅若忌光の波となる鷗

東京 山本 御代

辞書常に未完なるもの梅真白
家族より友良き頃や麦青む

東京 齊藤 保志

倒壊の伽藍を高く帰る雁

石川 井端 久子

ルビほどの紅き芽吹きありにけり
転寝をして初雷の二つ三つ

静岡 水野 恵女

杉玉を作る手捌き月光裡

千葉 甲州 千草

脱出のやうな離陸機轟ぐもり

千葉 藤野 武彦

あをあをと潮差す河口卒業す

鹿児島 小川 莎良

陽炎や君の後頭部が描けない

静岡 四條たんし

敵かに櫓の崩るる湯立の儀

徳島 齋藤 厚子

苗札の当て字ばかりが目立ちけり

神奈川 松下 宏民

しやぼん玉消えて一つにもどる空

東京 市川 浩実

ネクタイを取れば春風おのずから

富山 大谷こうき

滝落ちて月光あをく砕かるる

大阪 乾 祐子

鍋磨く手とはなびらを掬ふ手と

兵庫 市川 臺子

鳥の名の街に引つ越す聖五月

千葉 千葉くみこ

雪降りりプランクトンの泳ぐごと

埼玉 野木 和美

すみれ草膝ついて聞く児の話

千葉 木村麻利子

春愁のひとつづつ消す通話歴

神奈川 高橋 流行

夕桜濡らして磨く石と石

神奈川 矢羽野沙衣

春寒し軍民共用滑走路

神奈川 伊是名白峰

黙に來て黙に加はる終戦日

東京 前田 拓

回廊の板のすき間の卯波かな

広島 坂本たか子

戒名の一字が蝶となりにけり

鳥取 岩水 節子

引越しの最後は子猫ふところに

埼玉 吉永寿美子

白粥の光を掬ひ余寒なほ

兵庫 疋田美恵子

晚白袖剝く弟の蝮指

大阪 藤川 喜子

藍蔵の箱階段に花吹雪

北海道 角田 桑里

地方紙の異動の氏名四月来る

三重 伊藤 久子

国引きの浜いちめんの鱗雲

山口 島津 教恵

トースターボンと合格通知来る

岡山 岡田 邦男

海市より真白き鳥の飛びたてり

東京 辻前富美枝

桜漬ひらくあひだのまなこかな

東京 植田 也風

今瀬剛一選

上田日差し選

校庭の静かな広さ夏休み
月山の裾より晴れて雛送り

奈良 長谷川紀美子
島根 小村 絹代

もう会へぬ人かと思ふさくらかな

東京 金谷 洋次

音もなく水輪ひろがる遅日かな

東京 古館 泰子

あるだけの荒星能登にきらめきぬ

神奈川 半澤 清隆

造船の音を間近に甘藷植う

広島 坂本たか子

春暁の銅びかりの仔牛かな

兵庫 平尾美智男

踏みゆけば音立て匂ふ枯葉かな

京都 北嶋 八重

キヤプテンを決める車座芝青む

静岡 亀澤 淑子

暴れ枝縛りて売られ猫柳

京都 渡辺 佳子

昼寝霓雲踏むやうに畳踏む

埼玉 梅田ひろし

をちこちに石器の欠片鴟日和

東京 大月 弓香

すみれ野に万葉の空ありにけり

富山 荒田眞智子

上げ潮の匂ふ町川つばめ来る

広島 坂本たか子

白山吹咲いて義伸寺雨の中

和歌山 津田 京子

霧襖一步進めば一步退き

茨城 田中 ゆず

病室の薔薇の赤さを持て余ます

愛知 宇野 順二

縁とは看取ることなり月涼し

島根 若林 恒子

踏めば鳴る上野の森の落葉かな

千葉 梅園 久夫

風船を放し心の軽くなる

東京 関戸 信治

雨音の強まり朴の花白し

神奈川 天野 直子

サングラスかけて私に戻る旅

東京 井上 豊乃

病む人の喜びさうな土筆摘む

宮城 吉田 博子

緑児を寝かせるやうに雛納

愛知 鈴木 年春

囀の中に洗濯物を干す

大阪 森本 成子

虫出しの雷や五条の橋の上

静岡 柿内 清一

四方より見られてゐたり水中花

大阪 田中 清司

しりとりのごとまでつづくつづくし

神奈川 吉田 泰子

トラックより下ろすティンパニ雪催

千葉 三代川玲子

気流てふ見えぬもの見え鷹柱

茨城 宮丸千恵子

入社式に向かふ靴音かと思ふ

大阪 三宅 崇代

母の日の分からぬ母となりにけり

東京 成田 守隆

ゆつたりと進む客船春の風

北海道 前田 隆護

花ぶぶき螺鈿めきたる潦

滋賀 若林 白扇

噴水の向かう動かぬ氷川丸

神奈川 宮本登美江

鮫鱈の吊し切り風唸りをり

富山 四十物文代

どこからかピアノの音色春の風邪

東京 樋口亜茶子

子猫抱く己が心を抱くやうに

神奈川 喜多村純子

子を抱いて御輿洗ひのしぶき浴ぶ

京都 神原 廣子

海鳴りや流離のかほの古雛

秋田 岸部 吟遊

野薔や耳よく動く岬馬

沖縄 美里 かえ

春愁の息吹きかけて鏡ふく

福岡 大堀すが女

大串 章選

小川 輕舟選

花吹雪檻の孔雀も羽根揚げ
 一滴となるまで崖の氷柱かな
 バス停に母ひとり待つ帰省かな
 訃報来て賀状見返す二月かな
 縁とは看取ることなり月涼し
 秋麗やエレベーターに透ける街
 千年の朝市途絶え能登二月
 病歴も齢も忘れ生身魂
 牛蛙鳴くたび静寂深まれり
 春愁を絶つべく墨を磨つてをり
 母の日の分からぬ母となりにけり
 この町が第二の故郷燕来る
 卒業の固き指切りそれつきり
 青き踏むかつて軍馬の道なりし
 つばくらめ戦地へ続く空があり
 帰省して先づ仏壇の母に会ふ
 猫じやらし子ども食堂ある離島
 山門に入るや否やの花吹雪
 廃校に残る鉄棒犬ふぐり
 薄れゆく海市へ船の消えゆけり
 春の月故郷に続く鉄路かな

青森 土田 紫
 青森 蒲田 幸子
 大分 小松 丈夫
 埼玉 佐々木克明
 島根 若林 恒子
 広島 坂本たか子
 福井 村田 浩
 愛知 南崎 文代
 和歌山 倉田 信司
 埼玉 高松 文月
 東京 成田 守隆
 大阪 渡辺美紀代
 千葉 荒井ハルエ
 青森 下山 延子
 神奈川 高橋 菊江
 栃木 龍 太一
 大阪 齊藤 忍
 神奈川 龍野よし絵
 東京 小塚美智子
 東京 石崎 宏子
 宮城 垣花 千春

嘖を離れて高く嘖れり
 革ジャンを脱げばTシャツ献血す
 空き家けふ小さき空き地に夕つばめ
 横顔に夕日あかあか蕎麦干せり
 負けて聞く勝者の校歌夏逝けり
 馬術部の革の匂ひや日の盛り
 銭湯のかへり急がず牡丹雪
 入札の社宅の跡地おぼる月
 棚田打つ一人に鳶のこゑ澄めり
 太陽にまみれ海の子裸の子
 初蝶や郵便受けに子の便り
 やはらかき近江ことばや義仲忌
 菜の花や山裾抉る千曲川
 母笑ひみんな笑へりつくしんぼ
 水温む鵜舟修理の槌の音
 人形を焚きたる煙鳥ぐもり
 蜂の巣や円空仏のおはす堂
 涼しさや回転木馬地に触れず
 稲妻や夜間保育の子らの影
 ネクタイを取れば春風おのずから
 鶯の谷を狭しと鳴きにけり
 海市より真白き鳥の飛びたてり

埼玉 根岸 善行
 埼玉 宮本 豊子
 富山 二俣れい子
 広島 坂本たか子
 茨城 坪 文雄
 広島 坂本たか子
 北海道 泉屋 冬庵
 神奈川 大高 芳子
 広島 坂本たか子
 香川 岡田 貞幹
 新潟 高埜 健蔵
 山形 伊藤 厚子
 長野 萩原ワカキ
 山口 上田 純子
 愛知 荒川くみ子
 愛知 野田 美子
 東京 川俣このみ
 兵庫 千鳥 由貴
 愛知 中根由起子
 富山 大谷こうき
 鹿児島 池江 和
 東京 辻前富美枝

小澤

實選

權

未知子選

燕来て百年の土間生き生きと

埼玉 古郡 孝之

涼しさや回転木馬地に触れず

兵庫 千鳥 由貴

菖蒲浮く五右衛門風呂をいただきぬ

京都 藤堂くにも

家中の鏡に見せる花ごろも

東京 高原 桐

日焼して足速くなる子供かな

神奈川 門脇 明子

お遍路に手渡す米の白さかな

沖繩 筒井 慶夏

育児書もキーツもテスも曝書かな

大阪 高倉 明子

バス停に母ひとり待つ帰省かな

大分 小松 丈夫

叩かれて叩かれて野火鎮もれり

鳥取 玉井 瑛子

さらさらと赤子の見ゆるソーダ水

神奈川 高野 信一

校庭を鴉の歩く涅槃西風

静岡 青嶋三千代

今日生きる分の体操うららけし

神奈川 渡邊 文子

尻押して牛を積み込む余寒かな

静岡 亀澤 淑子

新しき楽譜の届く四日かな

富山 荒田眞智子

田搔牛夕日まぶしく帰りけり

広島 坂本たか子

降る雪やかすかに動く猫の耳

広島 坂本たか子

西行忌家の中とて杖を突き

岡山 大塚 功子

除夜詣どの闇からも人匂ふ

広島 坂本たか子

風吹いて葛の初花あらはるる

広島 坂本たか子

また何かしでかしさうな子猫の眼

愛媛 曾我部剛生

フィールドに突き刺さる槍雲の峰

千葉 辻 忠樹

雪吊や未だ真青なる加賀の空

東京 小林 清子

一本の桜に鳥も人も来て

三重 上村 和子

消ゆるまで尾灯見送る春シヨール

東京 高野 敏男

百五才母の髪切る日永かな

富山 角田 睦子

魚の名を母に教へる夏休

宮城 柏木ともみ

行く春や埴輪に残る指の跡

福井 西村 圭子

風にさへつまづいてをり花疲れ

富山 脇坂琉美子

啓蟄のサーカス小屋に獣臭

大阪 佐藤 英子

大西日カーブミラーに捉へらる

新潟 清水 恵子

三つ買ひ一つ供へる桜餅

千葉 塩野谷慎吾

獅子舞や三和土の光る船間屋

東京 田村登代子

枯野より枯野の色の鳥発てり

千葉 茶谷 静子

蟹の火をかこむ卵の花腐しかな

東京 岩男澄美雄

蛇出でし穴のまはりの濡れてゐる

兵庫 常澤 俣子

駅舎なき駅より通ひ卒業す

香川 端 あつ子

いづれ我が墓標とならむ遍路杖

長崎 小谷 一夫

ネクタイを取れば春風おのずから

富山 大谷こうき

グールドのバッハをかけて漱石忌

東京 福本美恵子

秋の夜や石に未生の仏たち

茨城 海老沢静夫

抜けし歯を見せ廻る子や花菜風

広島 中村 文子

先生の香水の香とすれ違ふ

鳥取 岩水 節子

イスラームの青年と見る春の虹

千葉 伊藤 苺

角谷昌子選

加古宗也選

爆音の翼がぬつと霾の街

東京 秋澤 夏斗

間引菜を手秤にして朝市女

石川 東 洸陽

滝落ちて月光あをく砕かるる

東京 古谷 裕子

古書店に肩たたかるとる遅日かな

広島 坂本たか子

軍艦島冬夕焼に燠となる

長崎 小林美智子

餅花を飾るここより飛驒の国

愛知 山岡 秀

跳躍の義足を外し夏終る

神奈川 半澤 清隆

初春や町一瞬にして瓦礫

石川 柘谷 栄子

春暁の鋼びかりの仔牛かな

兵庫 平尾美智男

花冷や牛を磨きて糶を待つ

兵庫 平尾美智男

満員の市電過ぎ行く大暑かな

広島 坂本たか子

吹雪くなか触るればぬくし寒立馬

愛知 尾崎恵美子

尻押して牛を積み込む余寒かな

静岡 亀澤 淑子

啓蟄や地下街で買ふ握り飯

愛媛 安藤みつる

比良比叡晴れて一気に鷹渡る

愛知 光田 道子

花冷えや震へてはしるモノレール

宮城 大沼せつ子

流れ着く能登の太鼓や野水仙

新潟 森山 恵子

寒鯉を白布につつま秤りけり

神奈川 矢沢 寿美

梧桐に夕日あまねし広島忌

広島 坂本たか子

仲見世に昭和のほふ春灯

愛知 原田津多江

韋駄天を祀る柱に蠅叩き

宮城 屋代ひろ子

初鴉や湖より明るる余呉の村

広島 坂本たか子

農事誌にちちの字の古る穀雨かな

栃木 和泉 澄雄

明日からは漁師になると卒業す

北海道 沼田 泥舟

避難所の椅子に仮寝や三日はや

石川 井端 久子

千枚田より千枚の青田風

富山 脇坂琉美子

うららけし最終講義すこし延び

宮城 柴田 和枝

来るはずの人のまだ来ず櫓を足す

東京 田村登代子

膝掛を猫に分ちてランブ売

沖縄 前田貴美子

老書家の書の大あばれして涼し

和歌山 倉田 信司

蝶生まれこの世ひそかに潤へり

青森 郡川 宏一

傾いて見える鉄塔日脚伸ぶ

東京 井坂 宏

孵卵器の卵殻透けて聖五月

東京 望月 澄子

月山の裾より晴れて雛送り

島根 小村 絹代

鳶引けば昨夜の星屑ついてくる

神奈川 木村 珠江

風光る生徒総出の地曳網

神奈川 野田まち子

あをあをと潮差す河口卒業す

鹿児島 小川 莎良

うららかや目より小さきカバの耳

三重 金津やよい

ランタンに身を寄せ地震の寒夜かな

石川 平田 るみ

桜守わけても老樹いとほしみ

東京 帯屋 七緒

反故よせてインクのかをる菜の花忌

福岡 末園 薫

春愁のひとつづつ消す通話歴

神奈川 高橋 流行

花種を蒔けり最後の献血日

愛知 黒部 祐子

花散るや後ろ歩きのパスガイド

東京 岡本 春水

片山 由美子 選

栗田 やすし 選

新しき楽譜の届く四日かな	富山	荒田眞智子	うりずんの風艶やかに陶器市	沖繩	宮城	勉
千台の車埦頭に日の盛り	愛知	佐藤三千子	靴音に監視されてる大試験	奈良	堀上	慶子
ストーブを囲みしづかな一家族	東京	みわ・さかい				
噴水や鳩と小犬と母と子と	愛知	藤本 恭子	干潟へと影ののびゆく鳥居かな	広島	坂本たか子	
干潟へと影ののびゆく鳥居かな	広島	坂本たか子	星飛んで瀬音ひときは高まりぬ	広島	坂本たか子	
いほむしり日あたる方へ歩みをり	広島	坂本たか子	寒鯉を白布につつみ秤りけり	神奈川	矢沢 寿美	
星飛んで瀬音ひときは高まりぬ	広島	坂本たか子	送り火を焚いて一人の夜となり	岡山	大月 幸子	
関伽桶のさかさに積まれ水温む	秋田	神成 石男	子は既に母の眼差毛糸編む	栃木	斎藤 光星	
をちこちに石器の欠片賜日和	東京	大月 弓香	閨門の鉦の鳴りだす花の昼	愛知	佐藤三千子	
来るはずの人のまだ来ず櫓を足す	東京	田村登代子	引越しの最後は子猫ふところに	埼玉	吉永寿美子	
トラックより下ろすティンパニ雪催	千葉	三代川玲子	田植機を洗ふ男の無精髭	静岡	河江 昌子	
筑波嶺に浮き雲ひとつ青き踏む	茨城	中島 暉子	百歳の声透きとほる初電話	和歌山	宮本 啓子	
剪定の青き木の香を束ねけり	千葉	鎌田 光恵	河童忌や終日雨の降り止まず	千葉	大久保文夫	
秋天に扉を開く正倉院	奈良	榊原 範子	図書室に椅子引く音や春寒し	東京	杉木 美加	
下駄の音かさなつてくる川開	東京	小泉 良子	春風や五体に馴染む車椅子	愛知	広森 敬子	
スコップをつきさし雪の深さ言ふ	徳島	本庄 潮乃	若冲の象の真白き立夏かな	福岡	中司 和子	
噴水の向かう動かぬ氷川丸	神奈川	宮木登美江	指笛に和してエイサー弾けをり	沖縄	宮城果報子	
イーゼルに描きかけの裸婦風光る	静岡	渥美 絹代	教壇へ散り込む桜吹雪かな	香川	岡 汀子	
永き日や一人のための夕支度	石川	松原かほる	軍鶏小屋の静もり烏瓜の花	埼玉	滝本 史代	
花御堂こぼれ来し花いただきぬ	東京	金田志津枝	一鉢に土が息吐く二月尽	神奈川	布施 政子	
母を呼ぶ子の菜の花に溺れさう	愛知	池田真佐子	花は葉に形見となりし輪島塗	兵庫	田邊 富子	
父の日や簞笥に父の服のまだ	岐阜	高木 恵理	ランタンに身を寄せ地震の寒夜かな	石川	平田 るみ	

古賀 雪 江 選

小島 健 選

地震の日のままの日めくり春立てり

青森 太田 直樹

しばらくは声で闘ふ寒稽古

愛媛 穴野 宏治

蕉門に十哲我に葱坊主

長崎 牛飼 瑞栄

倒壊の伽藍を高く帰る雁

石川 井端 久子

嫁ぎ来て新の軍手に雪を搔く

福井 下山 文子

蚪蚪生るる地震に綻ぶ千枚田

東京 宮澤美智子

白涼し黒又涼し袴能

奈良 池田 雪彦

涅槃西風蟹仰向けに量らるる

三重 渡邊 健

乾鮭の魔除けのごとく吊るしけり

東京 堀井より子

人形を焚きたる煙鳥ぐもり

愛知 野田 美子

ぶらんこが飛び込んでゆく大樹かな

東京 弾塚 直子

牡蠣殻の山に波寄せ村は過疎

岡山 森脇 八重

金継ぎの鈍きひかりや利休の忌

神奈川 伊原 文夫

めぐる春いくさ疲れの星ひとつ

栃木 池上 吟

能登からの塩の封書や二月尽

静岡 岩崎 武士

徒遍路一番星を追ひかける

香川 川本 一葉

厩舎より小さき産声雪しづる

千葉 関 妙子

震災の限界集落花万朶

石川 吉川 静代

魚の名を母に教へる夏休

宮城 柏木ともみ

主峰無き能登の背骨や竹の秋

富山 澤田 宏

慟哭のかくも静けき涅槃絵図

三重 松村 正之

子蟻螂はや正眼の構へなる

静岡 関口喜代子

船便で届く給食冬日和

広島 小都 妙子

子供らの指紋の残る金魚玉

大阪 山内 繭彦

坂本宮尾選

佐怒賀直美選

同じ鍵持つ三人の春炬燵	大分	睦ほたるこ	行く春や埴輪に残る指の跡	福井	西村圭子
真つ直ぐに歩くりハビリ麦は穂に	東京	平松尚樹	秋の夜や石に未生の仏たち	茨城	海老沢静夫
杉玉を作る手捌き月光裡	千葉	甲州千草			
太巻をはみ出す玉子村祭	東京	金谷洋次			
暴れ枝縛りて売られ猫柳	京都	渡辺佳子	徒遍路一番星を追ひかける	香川	川本一葉
野遊びの靴を飛ばして占へり	富山	平井弘美	探梅や鉄鎖の音が牛舎より	広島	坂本たか子
出港を待つタンカーや春の雲	神奈川	大高芳子	風の木となりて神木冬に入る	大分	木本真佐子
風吹いて葛の初花あらはるる	広島	坂本たか子	満月の亀ゆつくりと池を出る	愛媛	野村タカ子
閨門の鉦の鳴りだす花の昼	愛知	佐藤三千子	鬼の積む石段荒し花ふぶく	山口	岡村より子
古書店に肩たたかるとる遅日かな	広島	坂本たか子	土手の穂を手折り日永を帰りけり	静岡	杉澤修
箱型の家建ち並ぶ秋の暮	石川	井端久子	日焼して足速くなる子供かな	神奈川	門脇明子
うさぎの名亀の名呼んで卒園す	神奈川	松下宏民	花いかだ乱さぬやうに歛洗ふ	大分	松本公節
見つからぬあの路地港町の春	神奈川	喜多村秧子	駅舎なき駅より通ひ卒業す	香川	端あつ子
蝶生まれこの世ひそかに潤へり	青森	郡川宏一	日曜は娘と暮らす初茄子	山形	鈴木あい
調律の音の単調文化の日	愛媛	松井洋子	髭を振る天牛の背に雨の粒	静岡	鈴木健司
兄弟の笑顔そつくり福寿草	北海道	岩崎とし恵	はくれんの隙間の夜空濡れてをり	東京	望月澄子
蔵元に古りし雁木や春夕焼	広島	萩野りつ子	見世の間の格子越しなる女雛かな	三重	久世伸子
地に海に三月十一日が来る	東京	梶浦道成	母の句の母の字やさし花舞ふ碑	大阪	藤野智弘
水温む襟ゆるめたる旅衣	東京	福原康之	あけぼのの星へ風花消えにけり	広島	甲野裕之
幾度も目覚め夜干しの梅匂ふ	滋賀	小野雅子	鳥の名の街に引つ越す聖五月	千葉	千葉くみこ
買つてみやうか東京の桜餅	岐阜	七種萩子	花冷えや窓に小犬の鼻の跡	東京	堀内はる彌
白粥の光を掬ひ余寒なほ	兵庫	正田美恵子	女らに見つめられたる春の蠅	大阪	山内節子
しろがねの峰をならべて桃の花	大阪	仕田原恒雄	蒲公英摘む人麻呂仮寝せし丘に	奈良	酒井久美子

嶋田麻紀選

白濱 一羊選

晴れ渡る空が蓮の枯の中
囀や轆轤を回す一人の座
山口 大山 洋子
埼玉 高松 文月

言葉にも匂ひのありて春の雪
霧襖一步進めば一步退き
北海道 佐藤れい子
茨城 田中 ゆず

あたたかや見つかるようにかくれんば
白湯吹いて山を見てゐる蛇笏の忌
東京 越前 春生

はんだぎの修行半ばの面構へ
遠足の弁当好きなものばかり
岡山 西村 泉
広島 石橋 康徳

琉金の尾に衣ずれの立ちさうな
かもしかのまろき瞳や木の根明く
北海道 辰巳奈優美
愛知 山本 洋子

一粒の光になりて春田打
干若布音で乾きを聴きにけり
山形 佐藤権一郎
三重 西尾 敬一
兵庫 柳生 清秀

店番は農学部生種物屋
金縷梅の振れを伸ばす瀬音かな
岡山 高倉 早苗
宮城 石森千賀子

わが四肢に指令のさかぬ極暑かな
児の描く空とぶ電車風光る
千葉 平野みち代
三重 橋本 石火

仙人掌の葉より葉が出て春深し
木道を汗の歩荷に明け渡す
神奈川 佐藤 龍夫
広島 坂本たか子

降る雨を皆ほめてゐる田植かな
段ボール箱に天と地桃届く
広島 渡里トモ枝
埼玉 吉野真紀子

食卓のギンガムチェックこどもの日
馬飛べば騎手の尻浮く桜東風
東京 和田 眞美

春愁や名前出て来ぬ人とゐる
ひしめきて日のこなごなに貝割菜
愛媛 曾我部たかえ
岡山 森脇 八重

髭を振る天牛の背に雨の粒
静岡 鈴木 健司

去年より空を多めに剪定す
人の世につながるやうに雪を掻く
ずる休みしてゐる午後のしゃぼん玉
愛媛 岩瀬久美子
山形 小島 緑泉
千葉 町山 公孝

鈴木 しげを 選

染谷 秀雄 選

秋まつり笛を吹くべく帰りけり	埼玉	佐藤 弘	攻め焚きの火の匂ひたる雨水かな	広島	坂本たか子
はひふへほ「は行」は春の笑ひごゑ	福岡	隈 可須奈	青竹の柄杓の匂ふ御開帳	埼玉	坂本ひさ子
葱坊主ばつかりと空あいてをり	埼玉	新井 秋沙	引鶴のしづかに水と別れけり	岡山	磨家 泉
夫の名の一字を吾子へ日脚伸ぶ	東京	清水ひとみ	間引菜を手秤にして朝市女	石川	東 沈陽
新しき楽譜の届く四日かな	富山	荒田眞智子	上げ潮の匂ふ町川つばめ来る	広島	坂本たか子
結願の磴六百に初音かな	大阪	川上 純一	夕映えの長き一日や袋掛	愛知	古賀勇理央
をちこちに石器の欠片賜日	東京	大月 弓香	集合も解散も笛風光る	神奈川	橘田多賀司
明日からは漁師になると卒業す	北海道	沼田 泥舟	風船は右手左の手は母と	群馬	狩野 忠史
引越しの最後は子猫ふところに	埼玉	吉永寿美子	白湯で飲む葉八十八夜寒	東京	江川 和彦
冬紅葉見尽して旅をはりけり	石川	小谷 延子	囀を離れて高く囀れり	埼玉	根岸 善行
能登からの塩の封書や二月尽	静岡	岩崎 武士	ふらここの母に抱かるる熟寝の子	千葉	山本ますみ
風光る生徒総出の地曳網	神奈川	野田まち子	表札の父の名うすれ花は葉に	東京	足立 未明
蛭の火をかこむ卵の花腐しかな	東京	岩男澄美雄	地震の日のままの日めぐり春立てり	青森	太田 直樹
日脚伸ぶいつもの道を帰りけり	広島	津川 聖久	灌がるる度のかがやき甘茶仏	神奈川	高杉 桂子
杼のやうに出入りせはしき菓箱かな	愛知	古賀勇理央	体中薬にまみれて仔馬立つ	東京	金子 竜胆
手をさせば早き流れよ雁来月	東京	星野猪久子	鶴帰る寝墓に読めぬロシア文字	長崎	小谷 一夫
洛中の町名長し初つばめ	大阪	大島 幸男	太白も潤む弥生の夕籬	東京	川原真理子
山笑ふ舌嚙むやうな神の御名	島根	原 みさ	漆黒を裂く流燈の長々と	山形	金谷ゆかり
餅花を飾るここより飛驒の国	愛知	山岡 秀	秋裕薄くなりたる母の膝	愛媛	松井 洋子
小分にす母の葉や日脚伸ぶ	群馬	小林 茜	次の間もその次の間も雛の間	京都	蓮井いく子
水口は音生むところ日脚伸ぶ	神奈川	布施 政子	夫の干支乗せて小さな鏡餅	東京	菊田 和音
栄螺買ふ能登の訛にほだされて	熊本	加藤いろは	虹の上に虹立ちにけり二月尽	石川	宮田 勝

谷口智行選

徳田千鶴子選

花守となり遠国にあるといふ
海市より真白き鳥の飛びたてり

愛媛 榎木 優子
東京 辻前富美枝

心にも育つ日だまりつくづくし
はひふへほ「は行」は春の笑ひごゑ
草笛が得意でむかし餓鬼大将
涯までも空のととのひ鶴帰る
叩きつけ晒す楮に水硬し

三重 池田 綏静
福岡 隈 可須奈
奈良 高橋 翠
愛知 尾崎恵美子
兵庫 衣笠 修爾

厨子開く雪解湿りの風のなか
母の手を探る風船持ち替へて
枕辺の絵本のなかへ昼寝の子
をちこちに石器の欠片賜日和

広島 坂本たか子
神奈川 原田 紫野
香川 岡田 貞幹
東京 大月 弓香

子は既に母の眼差毛糸編む
勇魚追ふ沖へとどろく太太鼓
人くさき鯉の顔出す三鬼の忌
木道を汗の歩荷に明け渡す

和歌山 豊田 義久
埼玉 椎名佐和子
神奈川 佐藤 龍夫

落し文旧仮名遣ひかも知れず
植ゑし田へ朝月淡くかかりけり
次の田へ蝗はずでに移りけり
蕉門に十哲我に葱坊主

群馬 桐野 梅子
広島 坂本たか子
大分 片岡 学
長崎 牛飼 瑞栄
栃木 売野 緑

また川に戻るあやとり冬日向
引越しの最後は子猫ふところに
母笑ひみんな笑へりつくしんぼ
引鴨や雲の領巾振る鳥海山
初桜母の続きを編み始む

滋賀 古川 武人
埼玉 吉永寿美子
山口 上田 純子
秋田 岩谷 塵外
島根 江角 純子

大試験終へてピアノをたたきをり
遠くからあれは親父の祭笛
秋の日の踊り場に子をあやしけり
救援のへり冬虹を抜け来たる

神奈川 奥山きよ子
石川 井端 久子
埼玉 滝本 史代
埼玉 角田 節子
香川 植田 桂子

秋裕薄くなりたる母の膝
礼拝に小舟で来る海女夫婦
しやほん玉消えて一つにもどる空
料峭や一刀彫りの二羽の鶏
一鍬に土が息吐く二月尽

大阪 大島 幸男
愛媛 松井 洋子
愛知 中川キヌコ
大阪 乾 祐子
神奈川 吉岡 桂子

雨意兆すひとつ抜き出て鬼蔵
家中の鏡に見せる花ごるも
ちぐはぐな老いの体操花の下
花祭こんなところに百度石

東京 高原 桐
埼玉 川崎 穹子
神奈川 別所 信子

赤人も憶良も来ませ田芹摘む
月おぼろ水の匂ひの母の郷

神奈川 布施 政子
千葉 大沢美智子
青森 小笠原聖子

中坪達哉選

跳躍の義足を外し夏終る
嫁してより葬いくつ出す花の雨
神奈川 半澤 清隆
愛知 佐藤三千子

震災の紙面に包む露の臺
二つ三つ名のある園の子猫かな
静岡 佐々木忠好

つばくろの声を聞きつつ渡船待つ
食卓に消しゴムのかす日脚伸ぶ
広島 坂本たか子

錆釘を探してゐたり年用意
図書室に椅子引く音や春寒し
東京 杉木 美加

チュウリップ子の声聴きに公園へ
初桜母の続きを編み始む
福岡 重住志津子

落葉踏むどちらともなく肩寄せて
病室の間はず語りや吾亦紅
埼玉 玉田 和代

つくづく次の列車は二時間後
野良猫の爪研ぎゐるや木の根明く
大阪 大島 幸男

体幹を奔り抜けたる男滝かな
百歳に学ぶ十歳草の餅
山形 原田 みる

家寒し母が不在といふだけで
春泥の団子の並ぶ通学路
東京 鈴木 綾子

げんげ田といふには粗き花の数
去年より空を多めに剪定す
大阪 斉藤 忍

一歛に土が息吐く二月尽
白粥の光を掬ひ余寒なほ
神奈川 布施 政子
兵庫 正田美恵子

中原道夫選

卒業の日を遠洋の船の上
バーボンを教わったのは年忘
明易し五十年ぶりに母と棲む
霜柱折れ重なる光かな
東京 菊田 一平
大阪 石井 秀子
東京 嶋田 伸子
東京 勝又 洋子

風鈴を買はせる風の出でにけり
慟哭のかくも静けき涅槃絵図
琉金の尾に衣ずれの立ちさうな
神奈川 倉谷 安子
三重 松村 正之

山間の雨音たかく夏炬焚く
吾亦紅さわがせて去る山雨かな
かつかつとせがむ前脚厩出し
次の田へ蝗はすでに移りけり
東京 星野 将江
広島 坂本たか子
東京 馬場眞知子

乗鞍の鞍には乗らず寒の月
日鼻なき紙の雛にある視線
振花は母を少女にしてしまふ
水音の重くなりたる白露かな
家寒し母が不在といふだけで
徘徊の父よ勤勞感謝の日
日は雲に入りてさくらの白さかな
買つてみやうか東京の桜餅
笙の音に運ばれてゆく祭かな
剝製の靨を前に御慶かな
大分 片岡 学
長崎 牛飼 瑞栄
奈良 長谷川紀美子
富山 稗苗 良二
愛媛 松井 洋子
大阪 斉藤 忍
北海道 文梨 弘子
長崎 永野 潤子
岐阜 七種 萩子
東京 牧田ひとみ

岩手 岩渕 力耕

仲村青彦選

西村和子選

黙に來て黙に加はる終戦日

雪搔の屋根から屋根へ声かけぬ

春の雪空の重さも降り積もる

うりずんの風艶やかに陶器市

夕映えの長き一日や袋掛

白山吹咲いて義仲寺雨の中

菜の花に隠れて遙か牛のこゑ

鶏小屋に鍵落ちてゐる遅日かな

春風を追ひかけてゐる三輪車

田水張る村にひとつの大鐘楼

踏青や胸に校歌のよみがへる

震災の限界集落花万朶

六甲山囀る森を抱きをり

廃校に残る鉄棒犬ふぐり

凍つる夜の喪服のままの添ひ寝かな

ランタンに身を寄せ地震の寒夜かな

蟬の屍を返し地球を抱かせたる

蒲公英摘む人麻呂仮寝せし丘に

国引きの浜いちめんの鱗雲

しるがねの峰をならべて桃の花

東京 前田 拓

神奈川 塚本 治彦

宮城 村上つね子

沖繩 宮城 勉

愛知 古賀勇理央

和歌山 津田 京子

愛知 岩田 澄子

兵庫 千鳥 由貴

京都 平 万紀子

鹿児島 上野ミチ子

大分 今村 七栄

石川 吉川 静代

兵庫 三村 正助

東京 小塚美智子

千葉 都丸 浩美

石川 平田 るみ

愛知 磯村 久市

奈良 酒井久美子

山口 島津 教恵

大阪 仕田原恒雄

囀を離れて高く囀れり

花菜漬今は独りの台所

母の背をくるめば余る春シヨール

校庭を鴉の歩く涅槃西風

白山茶花散るとき紅の走りけり

勇魚追ふ沖へとどろく大太鼓

春暁のひかり呼び込む大漁旗

ぴかぴかに磨く革靴昭和の日

古書店に肩たたかると遅日かな

集合も解散も笛風光る

一斉に点り雪像さんざめく

谷川の響きて見えず朴の花

初桜まだそのままの父の杖

白神の櫛のおたけび木の根開く

望の夜のまだ開いてゐる果物屋

落葉掃く音遠ざかる写経かな

よき声の鳥の來てをり仏生会

草の根の土に食ひ入る早かな

子の返信早し短しあたたかし

傾くは寄り添ふに似て古雛

囀へ顔を上げたる修道女

つかの間の日照雨眩しむ仏生会

埼玉 根岸 善行

千葉 松井 伸子

大分 岩波千代美

静岡 青嶋三千代

広島 坂本たか子

和歌山 豊田 義久

神奈川 奥田 君子

東京 天野 正子

広島 坂本たか子

神奈川 橋田多賀司

栃木 吉成 裕

千葉 山口ひろよ

埼玉 新原 健

秋田 塚本 佐市

群馬 今井 妙

福岡 松本千佳子

静岡 渥美 絹代

岐阜 小林紀代子

宮崎 日高まりも

福岡 坂口 幸江

東京 大橋 洋子

神奈川 石原 杏

西山 睦選

鳥雲に入る呼び鈴をもう一度

神奈川 瀬戸 悠

家中の鏡に見せる花ごろも

東京 高原 桐

花菜風鳥の名残る干拓地

広島 大島 文子

育児書もキーツもテスも曝書かな

大阪 高倉 明子

今日生きる分の体操うららけし

神奈川 渡邊 文子

合格と不合格ゐて桜餅

東京 柳田りつ子

遠足やいきなり象の献花台

徳島 田上 幸子

山桜千手一つも遊ばせず

岡山 杉本征之進

蕉門に十哲我に葱坊主

長崎 牛飼 瑞栄

鳥帰る海へとひらく天主堂

東京 坂本 昭子

右手やや長かり勤勞感謝の日

埼玉 野坂 潭

革靴の歪つに馴染む遅日かな

神奈川 緑川美世子

丹沢の山見えてゐる初荷かな

神奈川 奥山きよ子

冬蜂の蕊にまるごと身を埋め

石川 井端 久子

救援のへり冬虹を抜け来たる

石川 井端 久子

避難所の椅子に仮寝や三日はや

石川 保田 禮子

みづうみの芯に日のあり種を蒔く

香川 植田 桂子

百日紅短く病んで逝きし母

愛知 外波山チハル

百歳に学ぶ十歳草の餅

東京 鈴木 綾子

母の名で呼びかけられし夏帽子

神奈川 西本美弥子

陽炎や歩けば遠き母校跡

鳥取 定常まゆみ

真つ先に雪を告げたる授業かな

東京 前田 拓

花御堂こぼれ来し花いだきぬ

東京 金田志津枝

野中亮介選

家中の鏡に見せる花ごろも

東京 高原 桐

徘徊の父よ勤勞感謝の日

北海道 文梨 弘子

どの子にも似合ふ制服入学児

大阪 吉田 喬

ワグナーを部屋より放つ梅雨晴間

栃木 平岡 丈子

水のある地球に生まれ種を蒔く

愛媛 宮部 敏博

遠足やいきなり象の献花台

徳島 田上 幸子

大噓するやつくづく一人なる

広島 坂本たか子

馬小屋に馬のをらざる帰省かな

神奈川 梅津 大八

男等を引き摺り回す十畳風

静岡 鈴木 順子

若冲の象の真白き立夏かな

福岡 中司 和子

鶏小屋に鍵落ちてゐる遅日かな

兵庫 千鳥 由貴

倒壊の伽藍を高く帰る雁

石川 井端 久子

花いかだ乱さぬやうに漱洗ふ

大分 松本 公節

妙齡のまま古雛となられけり

岡山 岡田 邦男

遠蛙今日を忘るる薬飲み

大分 上尾ヤス子

鬮鶏師ここ一番に立ち上がる

神奈川 松下 宏民

田楽や雨は鞍馬の向かうより

東京 市川 浩実

しゃぼん玉消えて一つにもどる空

大阪 乾 祐子

花守となり遠国にゐるといふ

愛媛 樫木 優子

女らに見つめられたる春の蠅

大阪 山内 節子

先生の香水の香とすれ違ふ

鳥取 岩水 節子

お遍路に手渡す米の白さかな

沖繩 筒井 慶夏

能村 研三 選

墓 目 良 雨 選

濡れそぼつまで濡れてみる春の雨

ねぢばなのねぢれねぢれてみだれざる

蔵窓を風がうがうと雛納

貝風鈴生まれし海を奏でけり

百灯の村百万の柿簾

春暁の綱びかりの仔牛かな

慟哭のかくも静けき涅槃絵図

静寂もまた音であり夜の秋

朧月時には死さへ甘やかに

長元坊天与の翼いただけり

空に満ち空に果てたる桜かな

惜春の空の高きを鳶かな

暗室のくゆる液体寺山忌

海明の海に傳く北斗かな

裂織の糸の七色山笑ふ

万緑のまん中吊り橋の真中

鷹舞へば詩人を統ぶる五月かな

端居して水のやうなる夕かな

はひふへは「は行」は春の笑ひごゑ

桜桃忌また雨音のかはりたる

天爵の高さありけり糸桜

芽柳の風のかたちの草書体

三鬼忌の春雷の夜の昇降機

兵庫 本土 彰

埼玉 西田せん六

静岡 小林美成子

静岡 川口八重子

東京 志磨 泉

兵庫 平尾美智男

三重 松村 正之

愛知 館野 茂子

埼玉 村田 菊子

京都 室 達朗

東京 高野 敏男

広島 坂本たか子

愛知 谷中 弘子

東京 坂本 昭子

愛知 荒川くみ子

青森 佐藤 幸子

東京 岩男澄美雄

東京 花房 礼子

福岡 隈 可須奈

山口 植野 史理

神奈川 須田 聡子

千葉 藤岡 貞夫

東京 千賀 邦彦

杖つきておぼろ月夜の迷子かな

片耳にピアスの教授桜桃忌

あたたかや見つかるようにかくれんば

声出して新聞を読む生身魂

白涼し黒又涼し袴能

白寿の身みどりに染まる干菜風呂

かつかつとせがむ前脚厩出し

炬燵から出ずに商ふ古本屋

乗鞍の鞍には乗らず寒の月

鳥雲に入る呼び鈴をもう一度

耕牛の鼻取りは母押すは父

晩白袖剝く弟の蝮指

冬蜂の蕊にまるごと身を埋め

蛇出でし穴のまはりの濡れてゐる

水取りやおとがひ尖るこもり僧

一球に三万が沸き夏つばめ

卒業の日を遠洋の船の上

鍋磨く手とはなびらを掬ふ手と

初電話地震見舞ひとなりにけり

日矢射して屋根替衆の声の飛ぶ

制服も返事も大きい一年生

徳島 勝瑞 高春

東京 花澤ちいこ

三重 服部たけし

大分 小松 生長

奈良 池田 雪彦

大阪 田島 もり

東京 馬場真知子

福井 上山 治生

長崎 牛飼 瑞栄

神奈川 瀬戸 悠

千葉 唐鎌 良枝

大阪 藤川 喜子

石川 井端 久子

兵庫 常澤 俣子

東京 羽住 博之

愛媛 松井 洋子

東京 菊田 一平

兵庫 市川 臺子

東京 高原 臺子

広島 下田あつ子

兵庫 中島 保

福永弘選

藤田直子選

風鈴を買はせる風の出でにけり
また何かしでかしさうな子猫の眼
かつかつとせがむ前脚既出し

神奈川 倉谷 安子
愛媛 曾我部剛生

卒業やタクトの先の無限大
山桜千手一つも遊ばせず
ゆつくりと大人になれよ鯉幟

京都 横滝 友子
岡山 杉本征之進
富山 荒田眞智子

震災の紙面に包む露の臺

東京 本木 紀彰

育児書もキーツもテスも曝書かな
言葉にも匂ひのありて春の雪

大阪 高倉 明子
北海道 佐藤れい子

あかあかと達磨ストーブ始発駅
麦秋やむかしは遠き隣町
少年がこころを開きクロッカス

北海道 赤繁 大河
千葉 藤田 満
東京 杉林 秀穂

白樺の馬柵もて花野堰かれたり
人形を焚きたる煙鳥ぐもり
春風や五体に馴染む車椅子

愛知 渡辺美智代
愛知 野田 美子

寒鯉を白布につつみ秤りけり
一年生まん中にして登校す
避難せし校舎に礼や卒業子

神奈川 矢沢 寿美
富山 吉野 恭子
富山 浅尾 京子

老書家の書の大あばれして涼し
男等を引き摺り回す十畳風
入社式に向かふ靴音かと思ふ

和歌山 倉田 信司
静岡 鈴木 順子

涼しさや回転木馬地に触れず
端居して水のやうなる夕かな
駅舎なき駅より通ひ卒業す

兵庫 千鳥 由貴
東京 花房 礼子
香川 端 あつ子

振花は母を少女にしてしまふ
母の名で呼びかけられし夏帽子

大阪 三宅 崇代
富山 稗苗 良二

蝶生まれこの世ひそかに潤へり
母の名で呼びかけられし夏帽子
村挙げて教師出迎へ花りんご
一歛に土が息吐く二月尽

東京 星野猪久子
青森 郡川 宏一
神奈川 西本美弥子
東京 今田 清三
神奈川 布施 政子

花守となり遠国にあるといふ
子を抱いて御輿洗ひのしぶき浴ぶ
噂や軋がりさうなガスタンク

愛媛 樋木 優子
京都 神原 廣子

霊山の鷹雲出でて雲に入る
春愁の息吹きかけて鏡ふく
菜の花の道菜の花に消えにけり
甘夏をでんと母の忌修しけり

兵庫 田邊 富子
福岡 大堀すが女
秋田 中村 榮一
埼玉 黒岩 裕介

傾くは寄り添ふに似て古雛

福岡 坂口 幸江

傾くは寄り添ふに似て古雛

埼玉 黒岩 裕介

藤本 美和子 選

松尾 隆 信 選

真つ先に雪を告げたる授業かな

東京 前田 拓

裸婦像の挙げし右手にさへつりぬ

愛知 富田 範保

春一番神馬の鈴を鳴らしけり

石川 宮崎 浩美

結願の磴六百に初音かな

大阪 川上 純一

杖二本立てかけてある日向ほこ

神奈川 相良 文雄

風の木となりて神木冬に入る

大分 木本真佐子

鯉跳ぬる音より寒の明けにけり

広島 坂本たか子

永き日の千年杉を見にゆかん

愛知 滝 典子

綿虫とゆつくり歩む夕べかな

奈良 小島 元博

幼子の手のなる方の恵方かな

神奈川 北浦 美菜

震災の海へ黙禱卒業す

青森 川村 丈夫

囀の中に洗濯物を干す

大阪 森本 成子

日焼して足速くなる子供かな

神奈川 門脇 明子

青竹の柄杓の匂ふ御開帳

埼玉 坂本ひさ子

能登の塩ひとふりしたる桜鯛

香川 植田 桂子

みづうみの芯に日のあり種を蒔く

香川 植田 桂子

あをあをと潮差す河口卒業す

鹿児島 小川 沙良

蛇穴を出て川音の高まりぬ

静岡 渥美 絹代

囀へ顔を上げたる修道女

東京 大橋 洋子

浅草に抜け道多し荷風の忌

熊本 加藤いろは

海市より真白き鳥の飛びたてり

東京 辻前富美枝

かもしかのまろき瞳や木の根明く

愛知 山本 洋子

また何かしでかしさうな子猫の眼

愛媛 曾我部剛生

月光のつき抜けてくる木立かな

広島 坂本たか子

太巻をはみ出す玉子村祭

東京 金谷 洋次

なぜなぜの果てや蛙の目借時

沖繩 嘉手納千石

同じ鍵持つ三人の春炬燵

大分 睦ほたるこ

流れ着く能登の大鼓や野水仙

新潟 森山 恵子

初蝶や郵便受けに子の便り

新潟 高埜 健蔵

満月の亀ゆつくりと池を出る

愛媛 野村タカ子

「幸齢者」てふ佳き言葉ビール酌む

埼玉 久保田英子

筋肉で舐を払ひぬ馬の脚

山梨 能登紀美子

四方より見られてゐたり水中花

大阪 田中 清司

我もまた水のかたまり春の月

青森 三野宮照枝

剪定の青き木の香を束ねけり

千葉 鎌田 光恵

エプロンにアイロン勤勞感謝の日

京都 平 万紀子

解なしといふが正解亀鳴けり

三重 前田 照子

柿の木の一気に芽吹く法隆寺

埼玉 竹田 正明

百歳に学ぶ十歳草の餅

東京 鈴木 綾子

水温む七つの川の広島市

高知 川添 節子

傘たたむ少女の指に春の雨

東京 嶋田 伸子

子に移す我が掌中の螢かな

埼玉 柳 四斗樽

笙の音に運ばれてゆく祭かな

東京 牧田ひとみ

松岡隆子選

改札を横向きに出る浮輪の子
花いかだ乱さぬやうに漱洗ふ
大分 杉本 恵子
大分 松本 公節

母の背をくるめば余る春シヨール
春の猫通ればともる防犯灯
岩手 岩波千代美
大阪 伊藤さとる

家寒し母が不在といふだけで
枕辺の絵本のなかへ昼寝の子
香川 岡田 貞幹
愛媛 六野 宏治

しばらくは声で闘ふ寒稽古
落し文旧仮名遣ひかも知れず
群馬 桐野 梅子
東京 関戸 信治

みんみんの来て裏山のみだれだす
満月の亀ゆつくりと池を出る
愛媛 野村タカ子
富山 脇坂琉美子

ふらここや夜は満天の星が漕ぐ
滝落ちて月光あをく碎かるる
東京 古谷 裕子
東京 吉田 純子

月光はしづかに老いて菊の花
雪搔の屋根から屋根へ声かけぬ
神奈川 塚本 治彦
石川 海野 正男

蟻穴を出でて瓦礫にまみれたる
囀を離れて高く囀れり
埼玉 根岸 善行
エンディングノート始むる春立つ日
兵庫 河田 智代

行くほどに空に近づく花野かな
菜の花や旅する方へ日の沈み
和歌山 島本 美紀
冬銀河父のみぬ子が父になる
広島 高田久美代

子育ての何が正解つくしんば
病歴も齢も忘れ生身魂
福井 伊藤 美穂
愛知 南崎 文代

南 うみを選

啓蟄や割つて卵の黄み弾む
入社式に向かふ靴音かと思ふ
千葉 川又 和子
大阪 三宅 崇代

子の返信早し短しあたたかし
風鈴を買はせる風の出でにけり
宮崎 日高まりも
神奈川 倉谷 安子

立つ雲と浮く雲秋は来つつあり
地吹雪の尿前の関越えにけり
長野 木原 登
広島 坂本たか子

山桜千手一つも遊ばせず
逆打ちの通路の息の荒荒し
岡山 杉本征之進
徳島 山田 百代

蟻穴を出でて瓦礫にまみれたる
囀を離れて高く囀れり
石川 海野 正男
埼玉 根岸 善行

みづ匂ふなり夏蝶の生まれたて
晚白袖剝く弟の螻指
東京 智久 薫子
大阪 藤川 喜子

老書家の書の大あばれして涼し
男等を引き摺り回す十畳風
和歌山 倉田 信司
静岡 鈴木 順子

水に浮く河馬の目玉や夏来る
陽炎や君の後頭部が描けない
東京 岩男澄美雄
静岡 四條たんし

菜の花に夕闇水のごとく寄す
夏芝居旁り合うて殺しあふ
高知 宮尾 直美
神奈川 樋口 冬青

尾を振つて馬が草喰む海霧を喰む
子蟻螂はや正眼の構へなる
東京 菊田 一平
静岡 関口喜代子

げんげ田といふには粗き花の数
しばらくは声で闘ふ寒稽古
島根 神田 敬子
愛媛 六野 宏治

三村純也選

村上喜代子選

太巻をはみ出す玉子村祭

新しき楽譜の届く四日かな

制服に身を泳がせて入学す

難問に天井仰ぐ大試験

初飛行ふるさと望む側に座す

塗香から始まる写経春障子

仙人掌の葉より葉が出て春深し

流木の龍伏すごとく秋の浜

遠足の列つぎつぎと山を呼ぶ

谷川の響きて見えず朴の花

三つ買ひ一つ供へる桜餅

荷を言はず汗の重さを言ふ歩荷

灌がるる度のかがやき甘茶仏

春愁やひとつ欠けたる対のもの

ひよんの笛吹き手選んで鳴りにけり

指笛に犬の疾走牧開く

満天の星に塩吹く梅筵

傾くは寄り添ふに似て古雛

浅草に抜け道多し荷風の忌

水しぶくほどは進まず浮袋

箱型の家建ち並ぶ秋の暮

勇魚追ふ沖へとどろく大太鼓

東京 金谷 洋次

富山 荒田眞智子

兵庫 岩崎可代子

大阪 角 雅行

大阪 南光 翠峰

神奈川 山崎 崇世

三重 橋本 石火

北海道 安田 潤子

長崎 牛飼 瑞栄

千葉 山口ひろよ

千葉 塩野谷慎吾

和歌山 倉田 信司

神奈川 高杉 桂子

東京 岩男澄美雄

愛知 古賀勇理央

大阪 白木原玲子

東京 島貫 和子

福岡 坂口 幸江

熊本 加藤いろは

大阪 西本 睦子

石川 井端 久子

和歌山 豊田 義久

子の返信早し短しあたたかし

声出して新聞を読む生身魂

昼寝寛雲踏むやうに畳踏む

白涼し黒又涼し袴能

初蝶や外階段の喫煙所

大試験終へてピアノをたたきをり

革ジャンを脱げばTシャツ献血す

啓蟄や辞書の一字が動きたる

初鴨来沼の形に空抜けて

うらかけし最終講義すこし延び

初桜雨の洗礼うけにけり

見て閉じる郵便受けや万愚節

振花は母を少女にしてしまふ

帰省して先づ仏壇の母に会ふ

秋桜母は遅れて笑ひけり

涅槃西風蟹仰向けに量らるる

ねぢばなのねぢれねぢれてみだれざる

陽炎や歩けば遠き母校跡

卒業やタクトの先の無限大

戒名の一字が蝶となりにけり

海市より真白き鳥の飛びたてり

宮崎 日高まりも

大分 小松 生長

埼玉 梅田ひろし

奈良 池田 雪彦

栃木 小林 由典

栃木 売野 緑

埼玉 宮本 豊子

兵庫 菱野としみ

栃木 関田 和子

宮城 柴田 和枝

愛知 大井 篤子

富山 畠山 美苗

富山 稗苗 良二

栃木 龍 太一

東京 角宮しづか

三重 渡邊 健

埼玉 西田せん六

鳥取 定常まゆみ

京都 横滝 友子

鳥取 岩水 節子

東京 辻前富美枝

森田純一郎選

雁風呂を焚かねど貝の殻あまた
叩きつけ晒す楮に水硬し
満員の市電過ぎ行く大暑かな
倒壊の瓦礫に積もる春の雪
初鴈や湖より明くる余呉の村
奥丹波山の際まで青田かな
春暁のひかり呼び込む大漁旗
比良比叡晴れて一気に鷹渡る
来るはずの人のまだ来ず楳を足す
石路の花咲いて玄海灘荒るる
母の日の分からねぬ母となりけり
松蟬や鑑真和上笑みたまふ
納屋の屋根やや傾けて大根干す
遠足の声なだれ込む青梅線
能登の塩ひとふりしたる桜鯛
札拜に小舟で来る海女夫婦
緋袴の折目正しき寒稽古
駐在に出前のとどく遅日かな
春めくや芸妓の襟足の白し
鳥帰る使はぬままのパスポート
花御堂こぼれ来し花いただきぬ
囀へ顔を上げたる修道女

富山 中島 平太
兵庫 衣笠 修爾
広島 坂本たか子
岐阜 三輪 洋路
広島 坂本たか子
広島 坂本たか子
神奈川 奥田 君子
愛知 光田 道子
東京 田村登代子
東京 不破 澄子
東京 成田 守隆
奈良 斎藤 利明
静岡 木下 保子
東京 能美 茅紫
香川 植田 桂子
愛知 中川キヌヨ
兵庫 西村 伸子
宮城 鈴木 勝也
奈良 木森 啓至
兵庫 杉崎よしこ
東京 金田志津枝
東京 大橋 洋子

横澤放川選

永遠の紺を畳みて卒業す
あるだけの荒星能登にきらめきぬ
春暁の銅びかりの仔牛かな
慟哭のかくも静けき涅槃絵図
春耕や鍬が光れば雲ひかる
田搔牛夕日まぶしく帰りけり
ゆつくりと大人になれよ鯉職
甲斐駒の風を抱へて雁帰る
フィールドに突き刺さる槍雲の峰
芽吹き初む前山父のをらぬ山
また川に戻るあやとり冬日向
月山の風よみがへる春田打
雛藏ふこの娘誰にも渡さない
炎天の電柱に巻く命綱
作業帽脱ぐやたちまち百千鳥
もう落ちて来られぬ高さ揚雲雀
沸々と煮立つ飯盒ひばり東風
教科書に弁当の染み花は葉に
傾くは寄り添ふに似て古雛

静岡 兵藤 惠
神奈川 半澤 清隆
兵庫 平尾美智男
三重 松村 正之
石川 高岡 幸子
広島 坂本たか子
富山 荒田眞智子
埼玉 佐藤 弘
千葉 辻 忠樹
岐阜 福井 英敏
滋賀 古川 武人
山形 伊藤 厚子
和歌山 倉田 信司
東京 山本 吉人
京都 山内 利男
東京 田中 久幸
埼玉 関 とし江
神奈川 大西 主計
福岡 坂口 幸江

● 選考経過

全国俳句大会委員長

小島

健

公益社団法人俳人協会主催、朝日新聞社後援の全国俳句大会は、今年第63回を迎えました。応募数は昨年より約685句少ない11,185句でした。この全作品は次の選者によって予選を行いました。

井上弘美・今井聖・上田日差し・權未知子・古賀雪江・佐怒賀直美

鈴木太郎・藤本美和子・松尾隆信・村上喜代子・山田真砂年（50音順）

予選は全作品を2名以上の予選選者が眼を通し、幅広く採るようにはしました。その結果、予選通過数は昨年より939句多い、1,950句でした。（応募句の17.4%）

予選通過作品はこれを無記名でプリントし、その中から42名の選者に各々特選3句及び入選20句を選んでいただきました。

各選者の特選句を2点、入選句を1点として集計した結果を、

大串 章・片山由美子・小島健・西村和子・能村研三（50音順）

の5名による選考委員会で審議を行い、高句句の中から大会賞を5句、秀逸賞を10句と致しました。選考の過程や選考後に作者に確認の結果、類句や既発表句等であることが判明した作品は、応募要領に従い入選を取り消し、該当箇所は空欄にしております。

ご応募いただいた皆様にお礼を申し上げますと共に、今後のご健吟を期待致します。また、選考に当たられた諸先生方に感謝申し上げます、ご報告と致します。